

# 介護福祉士養成校における外国人留学生の教育と支援

八子 久美子 菊地 みほ

日本福祉教育専門学校

## Education and Support for international students in the care worker training school

Yako Kumiko Kikuchi Miho

Japan Welfare Education College

**要旨：**介護福祉士資格を取得すれば日本での在留資格を得られるようになり、全国の介護福祉士養成施設を目指す外国人留学生が急増している。日本福祉教育専門学校においても数年前から本格的に留学生の受け入れが始まったが、今後、留学生の支援や教育の体制を構築するにあたって、まず彼らの生活実態やニーズを把握し、現在介護現場でも問題となっている異文化間摩擦の問題についての意識を知るためにインタビュー調査を実施した。留学生の求める支援は大きくは経済的支援と専門用語などの日本語学習支援であった。また日本の文化や習慣に関心を持ち、馴染むことが出来るかどうか、養成校での学校生活の質にも関わっていることが明らかとなった。それらの結果も踏まえ、いま日本福祉教育専門学校で実践している留学生の生活支援策や異文化理解教育の一端について報告した。

**キーワード：**留学生支援、文化・習慣の差異、異文化理解教育

### 1. はじめに

介護福祉現場における人材不足の問題が叫ばれて久しいが、改正入管難民法の施行（平成29年9月）により在留資格「介護」が創設され、現在、介護福祉士養成校を卒業した外国人留学生に現場人材としての大きな期待がかけられている。また平成33年度までの特例措置もあり、介護福祉士養成機関への外国人留学生の入学が急増している<sup>1)</sup>。このような流れの中で、日本福祉教育専門学校においても、インドネシア・タイ・フィリピン・ベトナム・ネパール・中国・韓国等、多様な国からの多くの学生が学んでおり、今後も留学生数は大幅に増加すると見込まれている。

数年前から本格的に外国人留学生を受け入れて来た日本福祉教育専門学校では、その教育実践の中

で、様々な経験を経てきた。留学生の存在は、共に学ぶ日本人学生にとって大きな刺激となり、教職員も含めた教育現場に、ダイバーシティ（多様性）への気づきをもたらすという良い作用がある一方で、学校生活や実習先でのトラブル等、様々な問題も噴出してきている。その問題の多くは、留学生のおかれている生活状況、および文化・習慣の差異からくる異文化間摩擦に起因したものであると考えられる。留学生が抱える生活問題と異文化間ギャップをインタビュー調査によって明らかにし、留学生への教育と支援について有効な実践方法を追究することが本研究の目的である。

そこでまず平成28年度に留学生の生活実態、日本の文化・習慣に対する意識という視点からのインタビュー調査を実施した（半構造化面接、介護福祉学

科留学生10名及び社会福祉学科留学生3名)。平成29年度には介護学科の新入留学生9名に対して、前年度の調査項目の上に、衛生観念に関する項目や日本の介護現場や教育現場で感じる異文化間ギャップの項目を付け加え、インタビュー調査を行った(倫理的配慮として、いずれの調査でも対象者に対し本研究の趣旨を十分に説明し、同意を得た上で実施した)。本調査は今後も継続し、平成30年度には介護福祉学科の30人程度の新入生にインタビュー調査を実施する予定となっている。これらの質的データの分析をふまえた上で、最終的には外国人留学生にとって真に有益な支援体制の構築と教育カリキュラムの開発を目指したい。

本稿では、これまでの調査で明らかになったこと、及び支援と教育方法の具体的実践例の一端について報告する。

## 2. インタビュー調査結果の概要

### (1) 生活上の問題

ほぼ全ての外国人留学生が直面している生活課題として、経済的問題が浮き彫りとなった。週3回以上アルバイトをしなければ、生活費や学費が補えないと答えた学生も半数近くいた。深夜や長時間のアルバイトにより、睡眠時間や勉強の時間が十分に確保出来ず、その結果として学校生活においても遅刻や欠席が増え、健康状態も芳しくないものとなっていることが明らかとなった。またそのような留学生は「孤独感を感じる」「意欲が低下している」と話すなど、精神面での不調も見られることが分かった。

その他の生活上の問題としては、住民票取得や携帯電話契約等の各種手続き、住宅やアルバイトを探すことにも困難さを感じていることが明らかとなった。

### (2) 学習上の問題

ほとんど全ての留学生が、「専門用語が難しい」「敬語が覚えられない」「漢字がなかなか習得出来ない」といった、日本語の学習に難しさを感じていることが分かった。特にタイやネパールなどの非漢字圏出身の留学生は、その傾向が一層強くなっている。これまでの多くの留学生に関する研究が明らかにしている通り<sup>2)</sup>、医学領域を含む介護分野の専門用語習得に苦手意識を持っていることが明らかと

なった。全ての留学生が、「学校に対して、日本語力向上のための支援を望む」と答えている。また、日本人学生と共にグループワークなどで一緒に学ぶことについては、「日本語を学べるので有意義」「日本の生活になじめるように感じる」「最初は留学生同士だけがいいと思ったが、日本人学生と一緒にないと学べない事が多い」という意見が多く聞かれた。

### (3) 文化・習慣について

「日本文化は伝統があり好き」「生活習慣やマナーがきちんとしているところが素晴らしい」といった

日本文化や習慣に関心があり、親和性を感じる傾向にある留学生は、日本人学生と積極的に交流し、学業や実習にも意欲的であることが分かった。逆に「日本文化に特に関心はない」と答えた留学生は、友人が少なく授業や実習への意欲も高くない傾向にあった。異文化間ギャップを感じる点については、「日本人はスキンシップが少なく、寂しく感じる」「日本は時間についての感覚が厳しすぎる」「日本は集団主義だが、母国は個人主義である」等があげられた。「清潔感にギャップを感じる。日本人は過剰に感じるほどのきれい好きである」「日本のお風呂に関する習慣に戸惑う(自分の国では人前で裸になることも、他の人の裸を見たりすることもない)」といった、介護に関わる生活習慣の違いをあげる学生もみられた。

## 3. 生活及び教育支援の実践例

現在取り組んでいる留学生のための生活支援の例としては、奨学金に関する情報提供、留学生専用ガイドブックの作成、留学生だけのオリエンテーション実施、インバウンド・ジャパン(住宅相談支援)等の団体との連携があげられる。留学生の健康状態や学習状況に大きく影響する、経済的安定のための支援策として、今後は奨学金の保証や、良い労働環境のアルバイト紹介等を実施していくことが必要になると思われる。

学習支援については、日本語習得の支援が喫緊の課題であるということで、平成29年度より週3回、日本語教師による補講を実施している。介護職員初任者研修修了者で専門用語に詳しい日本語教師による、細やかな指導が行われている。また、留学生が入

学前に学んでいた日本語学校との連携もすすめている。留学生の増加に伴い、さらなる日本語教師の増員や教材の工夫が求められるといえる。異文化理解を促進する学習支援については、次項で取り上げる。

#### 4. 異文化理解教育の実践例

文化や習慣の差異による誤解や摩擦については、外国人介護福祉士が働く現場の事例研究などで明らかにされつつあるが<sup>3)</sup>、介護福祉士養成機関においても、重要な課題である。例えば「時間」に対する感覚の相違は、学校の通常授業においても、施設実習においても大きな問題となる。日本文化・習慣における感覚では「遅刻」と認定される時間超過が、他の文化圏では全く問題と見做されない、という事がしばしばある。エドワード・T・ホールが明らかにしたように<sup>4)</sup>、時間や空間の認識は文化によって大きく異なるので、どちらが正しくどちらが誤っているという尺度で考えられるものではない。しかし、日本社会の中にある教育機関や介護施設で学ぶ以上、留学生に“日本的な時間感覚”ともいえるものを理解していただく事は必要である。そのためには、お互いの感じ方をきちんと伝え合い、理解・尊重し合う学びの機会が重要となる。

日本福祉教育専門学校では、平成27年度より、異文化理解のためのワークショップ授業が実践されてきた。留学生と日本人学生の混合グループを作り、自分達で留学生の出身国と日本の文化や習慣について調べ、発表し教え合うという、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れたものである。食文化や教育制度という身近なものから、その文化でタブーとされていることや諺の紹介まで、学生が関心のあることを幅広く学ぶ機会となっている。授業の振り返りページには「相手の国の歴史や文化について初めて知り、興味を持った」「もっとコミュニケーションをとっていろいろ教え合いたい」「お互いに相手の文化の価値観を理解し、尊重し合うべきだと強く感じた」といった感想が寄せられ、異文化理解の促進という面で一定程度の効果は上げていると思われる。

また、留学生と日本人学生との文化交流の場作りとして、料理サークルとのコラボレーションによる留学生の出身国及び日本の郷土料理を紹介するパーティや、民族衣装・歌の披露（於：学園祭、クリスマス



授業における異文化理解の取り組み



多様な国の料理紹介パーティ

スパークティ等)などの機会を積極的に設けている。

#### 5. 今後の課題

留学生へのインタビュー調査の項目をさらに吟味し精緻化して、質的データの蓄積と新たな観点からの分析を進めていきたい。外国人留学生にとって真に必要な支援は何かを明らかにするためには、生活支援や学習支援の実践に関して、的確な効果測定を行うことも重要である。また異文化理解を促進するための教育について、さらなる文献研究や他機関での実践事例の研究を進め、授業カリキュラムの開発を進めていきたい。イスラム文化圏やヒンドゥー文化圏からの留学生が急増している今、これまで日本の公教育ではあまり扱われず馴染みがあるとは言えない宗教学や、信仰に基づく多様な価値観や死生観について、教員と学生が共に学びを深めていく必要がある。介護福祉士養成校における外国人留学生への教育が、日本社会の中での支配的な価値観やルールの一方的な押し付けになることなく、多様性を認め合う豊かな相互理解と相互成長を進めていくため

の教育となるよう、その教育プログラムのあり方を真摯に探究していきたい。

#### 引用文献

- 1) 日本介護福祉士養成校協会が平成29年度に行った全国の養成校に対する調査において、全入学者に占める外国人留学生の割合が8.8%となり、平成25年の0.2%から急増していることが明らかとなった。
- 2) 三上ゆみ、久保田トミ子、ファハルドニコル「介護福祉士養成校における外国人受け入れの現状と課題」『新見公立大学紀要』(2012) 第33巻 p.37-42
- 3) 塚田典子 (2010)『介護現場の外国人労働者——日本のケア現場はどう変わるのか』明石書店
- 4) エドワード・T・ホール、日高敏孝・佐藤信行訳 (1970)『かくれた次元』みすず書房

#### 参考文献

- 1) 石井敏・久米昭元 (2005)『異文化コミュニケーション研究法』有斐閣ブックス
- 2) 久米昭元、長谷川典子 (2007)『ケースで学ぶ異文化コミュニケーション』有斐閣選書
- 3) 石川久美子 (2012)『多文化ソーシャルワークの理論と実践』明石書店
- 4) 原沢伊夫 (2013)『異文化理解入門』研究社
- 5) ジョセフ・ショールズ、鳥飼玖美子監訳 (2013)『深層文化—異文化理解の真の課題とは何か』大修館書店

受付日：2018年4月13日